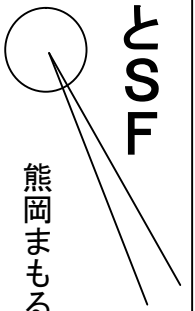
土とSF

熊岡まもる



考えてみれば、「土」と「SF」とは対極にある概念だと言えるだろう。

土とは、大地に通じ、「重力の井戸」の底にあるものであり、一方、SFは、文字通りサイエンス・フィクションとは考えなくても、その念頭には、多かれ少なかれ「科学」というものがあり、宇宙(そら)かけるイメージがつきまとう。

土とSFは、決して交わることのない概念と言うことも出来よう。

だが、果たして、本当にそれだけなのだろうか？

＊

かつて、荒巻義雄氏が「術の小説論」で提起したのは、科学の本質が「術」――手を使う技術にあるとしたことだった。

だとすれば、土とかかわることは、術の根本なのではないだろうか。すくなくとも、工業技術は大本をたどれば、農業技術から発達してきたと言ってもいいだろう。

農業、つまり、土と交わることは、歴史的に見ても人間の活動の原形だと言えるだろう。

そして、その原形性には、技術がどんなに進歩しても変わらない部分があるのではないだろうか。

＊

実は、私も家で土いじりをしている。

住んでいるのが北海道なので、出来るのは夏場の間だけだが。

庭に、それこそ、猫の額ほどだが畑があり、ここで野菜を作っている。その他に、庭や軒下の草むしりなどもしている。

なにぶん素人がやっているので、野菜作りはうまくいく年もあれば、うまくいかない年もある。そのような、いわば自然相手にする賭けが、野菜作りの醍醐味のような気もする。

土をいじっていてつくづく感じるのは、自分のやっていることが、人類の長い営みに連なっているな、ということだ。これまで、多くの人が地べたを這い、種を蒔き、肥料を施し、水をやって野菜を育てた。その営みは、人類の歴史を形作ってきたといってもいいだろう。自分もその中に参加しているという感覚が得られることがある。

＊

土と交わって生きることを、自ら実践したり、作品に結実させたりしている作家は、SFの分野では少ない。

数少ない例が、石飛卓美(いしとびたくみ)氏である。

石飛卓美氏は１９８７年、『人狐伝』で長編デビューした。その後、伝奇、アクション等さまざまな分野で作品を発表している。

石飛氏は、故郷島根県でシイタケ農家を営むかたわら、小説を書いている。文字通り、晴耕雨読を実践しているのであ

る。

石飛氏とまではいかなくても、土とふれ合うことを創作の糧として生かしていくことが出来れば、それは幸せなことなのではないかと思う。

＊

土とふれ合うことによって得られる、自然との一体感。

その感覚を、結実させた作品として、Ｊ・Ｇ・バラードの『夢幻会社』（サンリオＳＦ文庫）を挙げよう。現在では入手しにくくなっているのが残念だが、これは傑作である。英国ＳＦ作家協会賞を受賞していることからも、それはうかがえる。

この作品は、一種のファンタジイだが、バラード独特の文体で語られる、いわば、ニューウェーブ風のファンタジイである。

ストーリーはこうだ。

今まで一度も飛行経験のない若い男が、セスナを盗み出してロンドン空港を飛び立った。そして、郊外の閑静な町シェパトンのテムズ川へ突入し、町の人々に助け出される。この男はブレイクと名のり、数日を経ずして、町とその住民をすっかり変貌させてしまう。ついには、住民たちに飛行術や変身術を教え、とうとう、〈個〉から開放し、死と生の結婚にまで導いていくのだった。

この作品の中で、主人公ブレイクが、全裸で大地を相手にセックスをするシーンがある。

文字通り、大地と交わっているのである。

バラードがどのような意図で、このシーンを書いたのかはわからないが、機械文明に冒された人間の、全体性を回復する活動として大地とのセックスを考えていたのでないか。少なくとも私にはそう思える。

＊

大地と、あるいは土と、セックスしたいと思うほど、恋焦がれてはいないが、私自身、やはり、土に引かれる。

ずいぶん昔、幼い頃に、粘土遊びをしたとき、単一の色で、均質の粘土から、色々な形のものが作り出されることに、私は喜びを感じたものだった。それは、原初をたどれば、泥んこ遊びの喜びに通じるだろうし、さらにさかのぼれば、土いじりでの、大地との交感とでも言うべき感情に通じるだろう。

それほど、土と交わることは、人間の本質的な部分と関わりあっているのではないだろうか。

土と交わることは、今までＳＦでは、ほとんど顧みられてこなかった、新しい素材をわれわれに与えてくれるのではないだろうか。

単にエコロジーではなくて、もっと深い、人間の全体性の回復とでも言うべきテーマ。それは、これからのＳＦは、多かれ少なかれ扱わなければならないのではないかと思うが。そういったテーマにとっても、土と交わることの重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはないのではないかと思う。

（了）